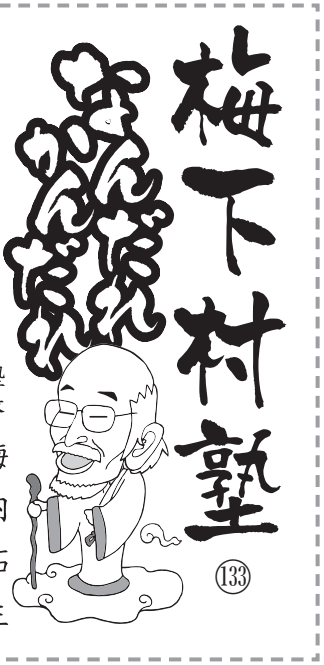
「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



（ツバキと気仙の魂と心No.2）

21世紀は現代文明の限界と問題への対応の困難が身に深くしみ込んでくる時代になるだろうという予測がある。この地球に生命が誕生して40億年前後の間に生物は撃滅の危機に数回も遭遇している。

このような生存の危機の歴史の積み重ねのなかから、人類が誕生し、現代につながっているのである。人類は「ことば」を獲得して、本能の縛りから解放されたといわれている。しかし、人類が獲得した本能からの自由がいまや、人類の存続を脅かすことにつながっているのである。

20世紀の初めには地球上の人口は20億前後であったがここ100年で4倍以上にも膨れ上がっており、人類存続のためのさまざまな環境・生態学的困難が生じている。

現代を生きている人間は20世紀までに蓄積した経験から21世紀を生き抜くための知恵を創造しなければならない。人口数は経済発展の指標であるGDPの増加と平行していると考えられてきたが、21世紀には経済、政治、文明への新しい考え方が必要とされている。

現代の文明国のなかで、日本は出生数の抑制がみられているが、ほかの国では出生数の抑制はあまり明らかでない。GDP経済から別の新しい生存文明の創造への思いが弱いのである。

1万5000年以上前の縄文文化は文字文化を生み出さなかったが、縄文土器、貝塚、村落の発掘から、自然への畏怖と感謝のつながりのなかで自然認識と集団認識とがつながった価値意識を創造したものと考えられている。

縄文蝦夷の文化を引き継いでいる気仙地方文化には人類存続をめざす文明の創造を目指して発信すべきものが生まれている。その魂と心は赤崎中学校の俳句に気仙のツバキに託して詠まれている。

（寒と椿）

寒い日も椿は赤く花開く
白波のしぶきをあびる寒椿
雪景色椿の姿浮き上がる
春近し庭の雪から椿の芽
白い雪思わず目をひく寒椿
寒椿未来に残せこの花を
春椿今年も赤く咲きにけり
赤と白咲いてまもないその命

北国の厳しい寒さに耐えて命をつないで芽吹き始めた寒椿、そして一輪の花、その赤い花びらに命を伝える使命の力が伝わってくる。

返　句

雪風に耐えて花咲く寒椿

（故郷のシンボル）

そよ風にゆらりゆらゆら赤椿
早足で真っ赤な椿落ちていく
ふるさとに咲き誇る椿めでたいな
大船渡一面に咲く赤椿まっすぐに天まで届く椿かな
赤椿願いをのせて咲き誇る
はっきりと遠くに見える赤椿
赤椿太陽の下紅ほっぺ
震災に負けじと咲くよやぶ椿
ふるさとの町を見守る椿かな
大船渡町を見守る椿かな
赤椿においただよう大船渡
大船渡町のシンボル赤つばき
椿咲く色とりどりに咲き誇れ
日の光照らし輝く椿の葉
我らにも黄金の椿咲きにけり
満開に咲いているのは椿かな

北限のツバキをシンボルとする気仙郷の大船渡市はツバキに秘められている生命力を潮流と文化の交流を通して世界の他の文化と価値認識の共有を目指す使命があります。

返　句

森と海椿の里に鳴くる

（北限のパラダイス）

そよ風にゆらりゆらゆら赤椿
はっきりと遠くに見える赤椿
まっすぐに天まで届く椿かな
椿咲く色とりどりに咲き誇れ
日の光照らし輝く椿の葉
赤椿においただよう大船渡

北限のツバキが咲く気仙地方は冬を耐えると春の訪れが早く3月になると川辺にはネコヤナギも咲きだします。まさに北限のパラダイスです。

返　句

冬耐えて春の息吹や寒椿

（東海新報記事から）

1月21日（火）の第4面に「広域トピックス　思い出写真　家族の元に　初の展示会・返却会　6万点　手掛かり求めて　水沢で被災地で拾得、洗浄」が掲載されている。震災発生から2年10カ月。心の復興へ地道な作業が継続している。

第7面には「地域資源と防災学ぶ　震災の語り部ガイド講座　陸前高田」が掲載されている。これらの記事には縄文蝦夷の魂と心を受け継いでいる歴史の記憶と忍耐力のたましいのへの思いが浮かんでくる。「つばきまつり開幕　大船渡　見ごろの花々迎える　世界の椿館で3月23日まで」の記事がこの思いに花を添えている。